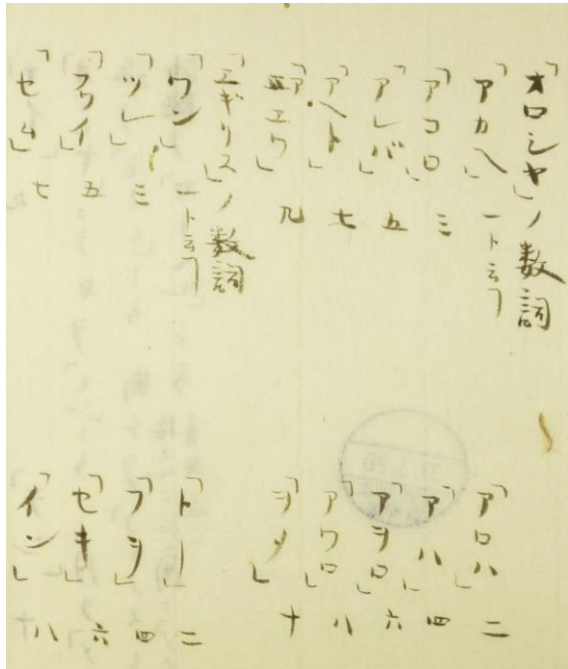
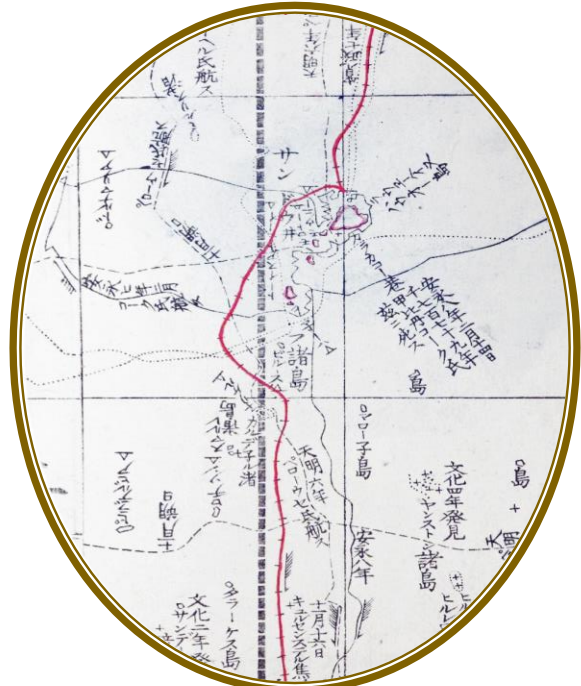


平成31年新春展

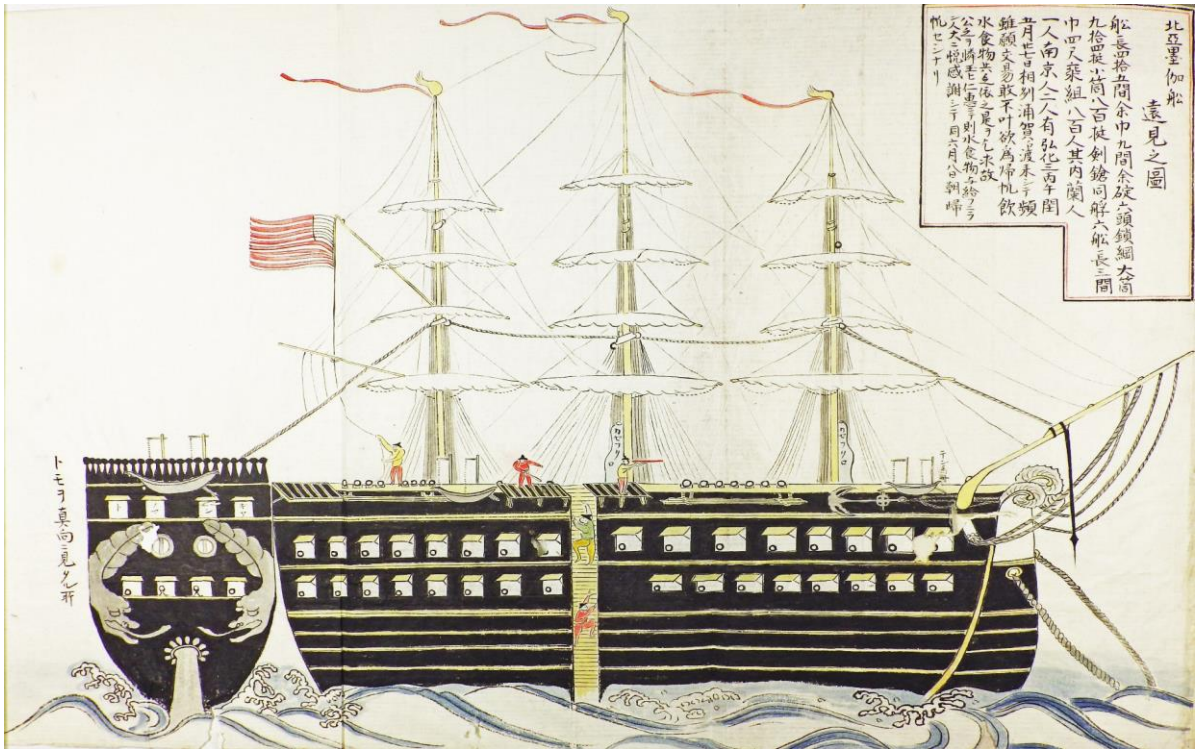
幕末加賀藩と異国船



特20.3-8 「漂海略記」(〔異国船記録〕より)(部分)



特22.6-29 [世界航海全図](部分)



特16.85-158 「北亜墨伽船遠見之図」(「異国船一卷」より)

平成31年2月12日(火)～平成31年4月14日(日)

金沢市立玉川図書館

近世史料館

はじめに

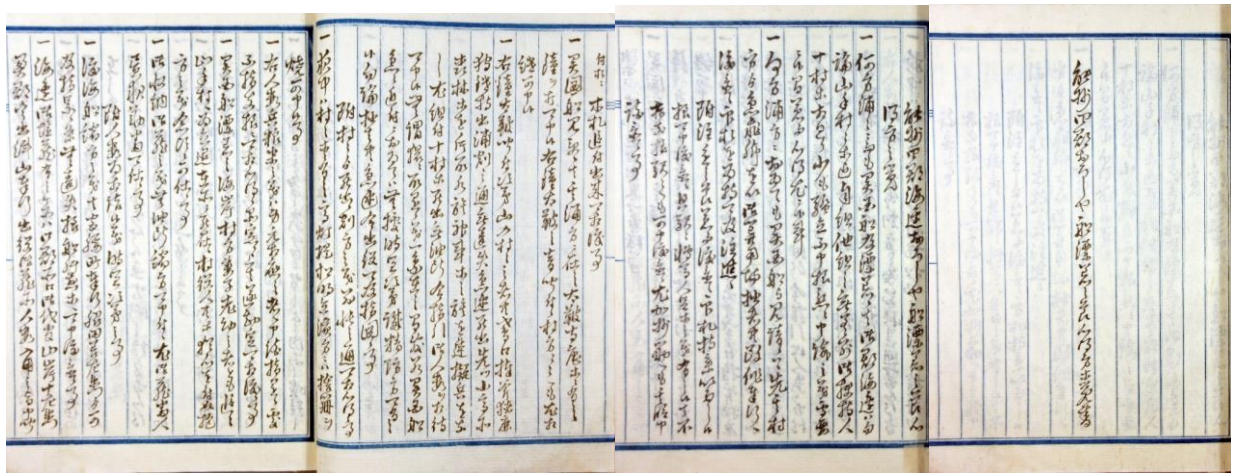
幕末期はペリー来航を始めとし、交易関係のない異国船(外国船)が次々と日本へ来航しました。加賀藩近海でも異国船が目撃されました。異国船の度重なる来航は国全体の問題となり、幕府からは江戸近海の警衛やアメリカ大統領の書翰などへの意見を求められました。

また、所口港(現七尾港)は日本海側における開港場の候補地として注目され、慶応3年(1867)にはアメリカ・イギリス・フランスが測量に訪れました。さらに、加賀藩内でも漂流した際に異国船に救助され、外国をめぐった者もいました。

本展示では、加賀藩での異国船来航の事例と幕府からの書状を中心に異国船をめぐる加賀藩の様子について紹介します。

ペリー来航以前の異国船到来

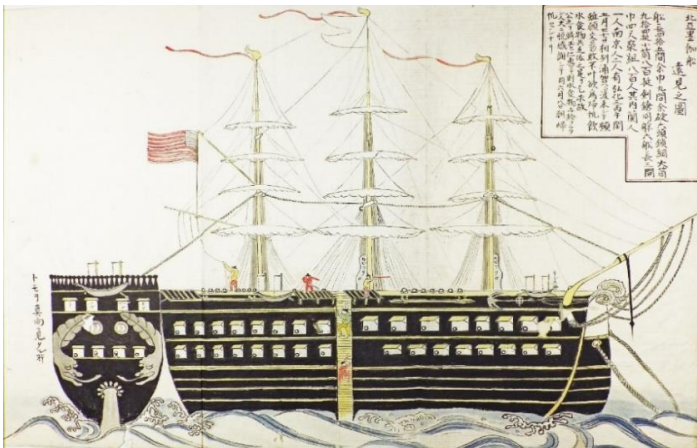
ペリー来航以前にも日本との通商を求めて異国船が来航しました。幕府は、対外関係を中国・朝鮮・琉球・オランダに限り、新規の関係を結ばないことが「祖法」であるとし、通商を拒絶し、異国船への警戒を強めました。



「能州おろしや船漂着之筋心得方等覚書」(「文化年間書物留」16.56-1②より)

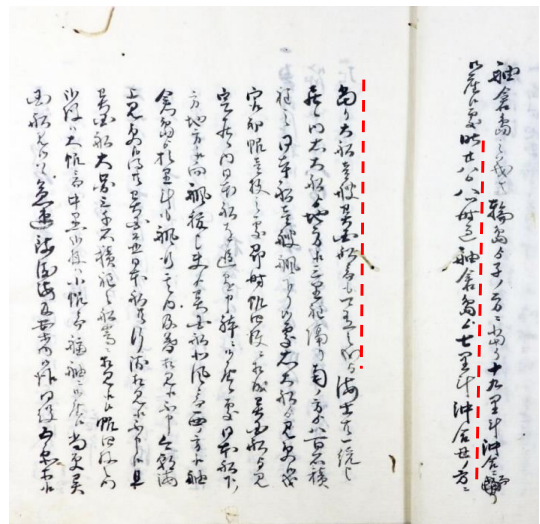
加賀藩でも異国船来航に備えました。

文化2年(1805)から同7年(1810)における能登での海防関係等を記した「文化年間書物留」には、文化5年(1808)に出された「能州おろしや船漂着之筋心得方等覚書」が収録されています。土地の多くが海に面している能登の村々における異国船来航の際の情報伝達の方法や出役が考えられていたことがわかります。



「北亞墨伽船之遠見図」(「異国船一卷」16.85-158より)

「異国船一卷」には、弘化3年(1845)のイギリス・フランスの琉球来航や同年に浦賀へ来航したビッドル率いるアメリカ艦隊に関する報告書などが収録されています。巻末には、「北亞墨伽船之遠見図」があり、浦賀に来航したアメリカ船が描かれています。

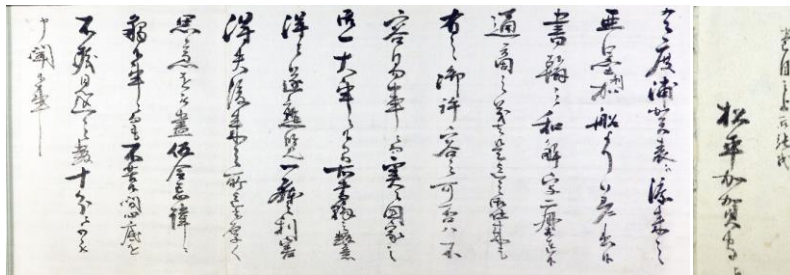


「異国船雑記」(16.56-27)

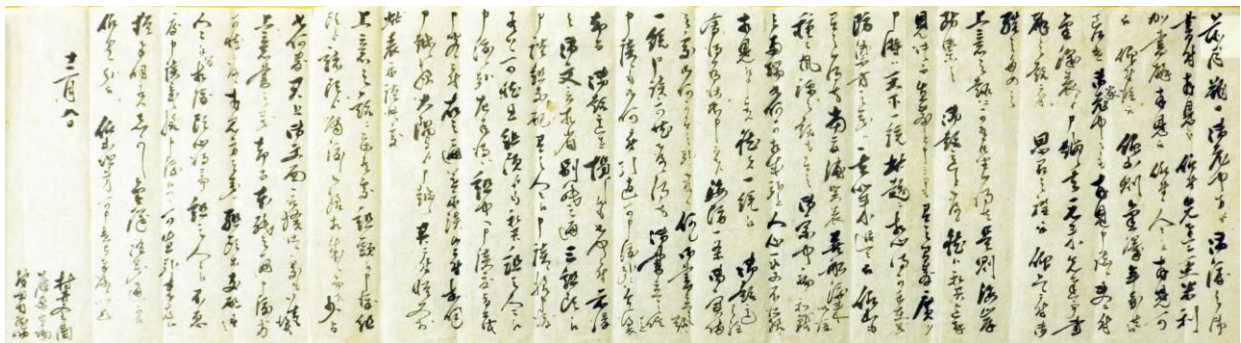
本史料には、嘉永元年(1849)4月28日に能登輪島の舳倉島付近で異国船と思われる大船が目撃されたことが記されています。ペリー来航以前、加賀藩領内でも異国船らしき大船が目撃されていたことがわかります。

ペリー来航

嘉永6年(1853)6月、浦賀にペリーが来航しました。幕府はペリーの渡したアメリカ大統領フィルモアの書翰を諸大名や幕臣に公表し、意見を募りました。加賀藩でも藩主前田齊泰とその嫡子前田慶寧が意見を求められました。齊泰は、防備が整うまでは寛容に対応し、整った後には相手国次第で「神武之勇気を御示」すべきだと答え、慶寧は齊泰に同意であると上申しました。(『加賀藩史料』藩末篇上)



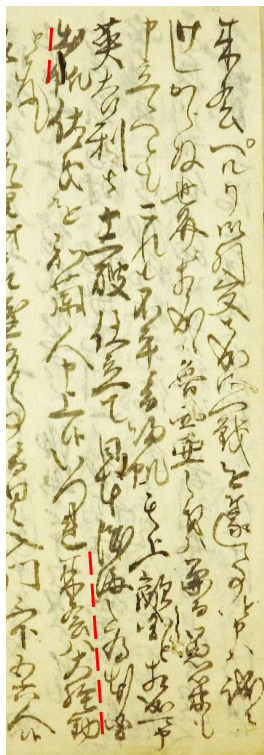
「アメリカ船浦賀来航に付松平加賀守宛書状」(『外舶来港等書類』16.85-150④より)



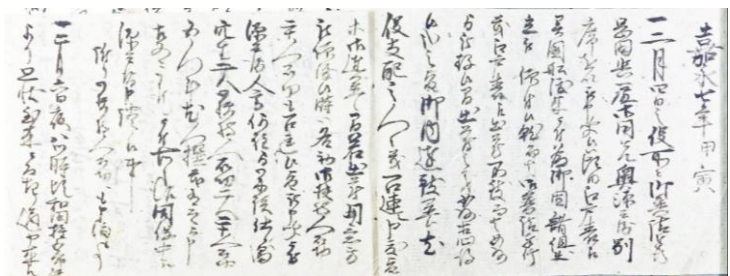
「異国船渡来海防方仰出義二付伺書」(16.56-12)

同年11月1日、幕府は翌年のペリー来航を含め異国船への対応の方針を発表しました。その内容は、なるべく穏便に対応するが相手国次第では戦争を始める可能性もあるため、防備の準備を進めることを求めるものでした。加賀藩ではこれを受けて、藩内での対応方針の伝え方について年寄・家老内で話し合われました。

来春ペリー御引受被成候一戦を被遂候事と申八誠二
けしからぬ世界二相成候、魯西亜之義八兼而愚策も
申立候へとも、これでも不平二而帰帆、其上敵国と相成可申、
英吉利は十二艘仕立て日本渡海之為来春八大騒動
と奉存候、



「松平陸奥守儒者大槻平二より平八江書翰」(『異国船渡来一件写』22.2-31②より)



「異国船一見に付被仰渡之趣」(19.9-193)

嘉永7年(1854)のペリー再来航に向けて幕府は諸藩に江戸近海での防備を命じます。

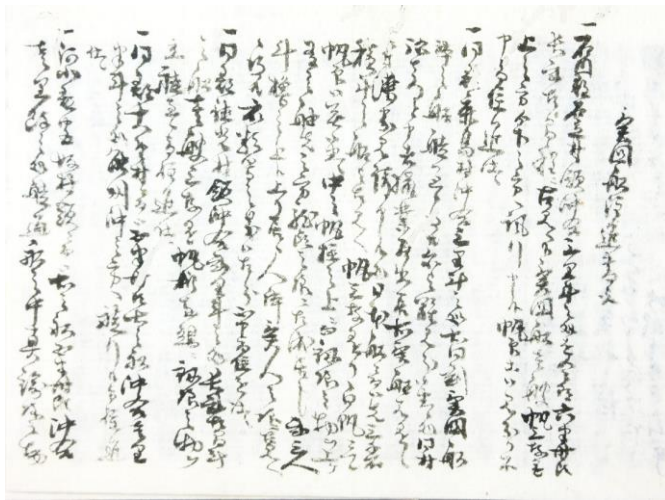
本史料では、土工に関することを担う普請奉行内でもこのことについて話合われていたことがわかります。

大槻平二(平次)は大槻磐溪の名前で知られ、ペリー来航の際には開国論を主張しました。本史料では、ペリーの再来航を含め異国船来航について触れており、「来春は大騒動」と述べています。

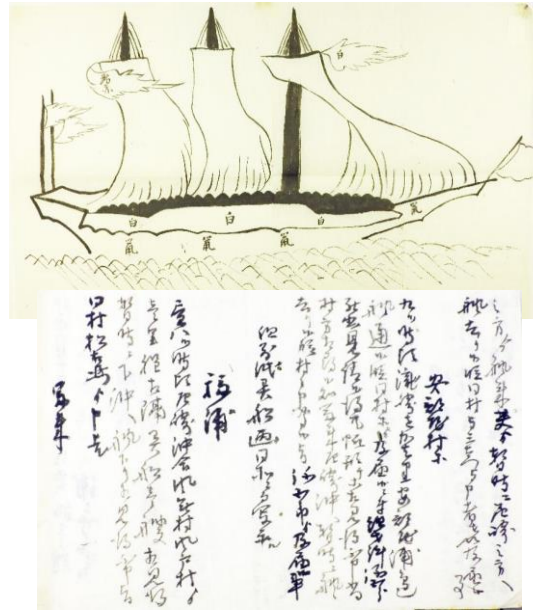
宛所の「平八」とは、本史料が岸文庫にあったことから、大槻とも交友のあり、岸家から養子となった加賀藩の儒者永山平太(初名：平八)と推測されます。

加賀藩内での異国船目撃

ペリー来航を始め異国船の来航が注目される中、加賀藩近海でも異国船が目撃されました。



「諸事要用日記」(16.42-31)⑥

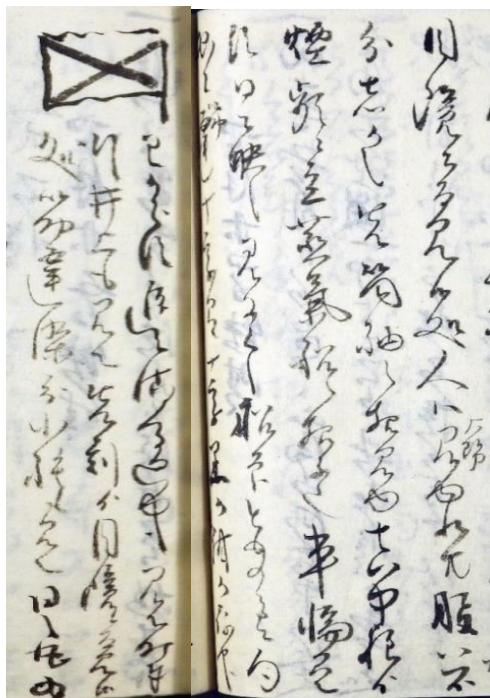


「異国船体一艘羽咋沖合航通一卷」(17.6-5)

安政2年(1855)4月14日、石川郡から羽咋郡にかけて異国船が目撃されました。

当時家老であった中川典義の記録には、宮腰(現金石)近海で異国船が目撃されたことが記されています(「御家老方等諸事留」16.41-178②)。また、大村致知の記録にも、同伴について加州郡奉行から出された異国船の目撃情報をまとめた「異国船注進書取」などが記されています(「諸事要用日記」)。「異国船体一艘羽咋沖合航通一卷」には、羽咋郡の村々からの報告に関する書状の写が記されています。

これらの史料から、藩内での異国船の目撃情報は、村々の目撃者から村の役人へ、その後藩の役人へ伝えられ、藩の中樞まで伝達されていたことがわかります。



「魚津在住御用日記」(16.63-55)

目鏡二而見候処 人ハ大勢見ゆ 真中柱方 服ハ不
分ししかし先筒袖之様子也 車輪見へ
煙頻立映し蒸氣船に之様印とも方
す、地二筋違・十字有・十字黒か紺か何や
わからす、

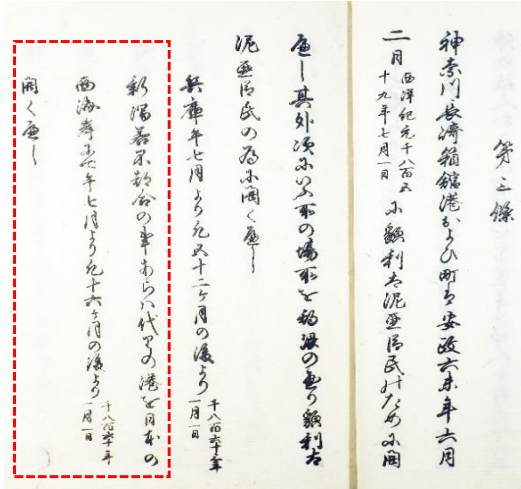
また、安政6年(1859)4月24日には、越中伏木や魚津で異国船が目撃されました。

本史料には、魚津在住であった成瀬正居が目撃情報をうけて異国船を観察したことが書かれています。異国船の船印(帆印)の図も描かれており、白地に黒か紺の十字があったと記されています。これらのことから、この異国船はロシア船であったと推測されます。実際、同年4月22日にはロシア・オランダが新潟へ測量に訪れていました。

所口の測量

安政5年から同6年(1858-1859)にかけて幕府はアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスと条約を結びました(日米修好通商条約など)。「条約等に付廻状写」(16.24-5)からは、条約締結に苦心する幕府の姿が窺えます。

締結された条約では西海岸側(日本海側)の開港場として新潟が設定されました。しかし、新潟が不適当な場合は西海岸側にある他の一港を開港することになっていました。この新潟に代わる開港場の候補地として所口港(現七尾港)が注目されました。



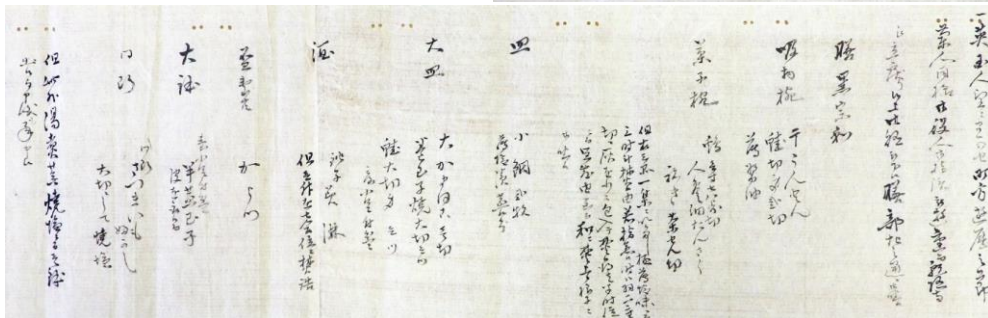
「英吉利国条約並税制」(20.3-14)



「人相書(オランダ人ピウ-スケンなど) 絵図」
(「外舶来港等書類」16.85-150⑩より)

新潟に代わる港を決めるため、安政5年(1858)11月と慶応3年(1867)8月に外国奉行が加賀藩へ調査に訪れました。

文久元年(1861)には、幕府からイギリス測量船が加賀藩に訪れることが予告されました。これを受けて加賀藩内では、イギリス船来航時の対応について話し合われました(「英船為測量可致渡来二付僉議方一件」16.56-33)。また、江戸では津田権五郎(道賢)が外国奉行の柴田貞太郎にイギリス船来航時の対応について問い合わせをしました。(「英国人為測量御領海可致渡来旨等被仰渡一件」16.56-32)。



「英船渡来之節伏木肝煎彦五郎等書状」(16.56-26)

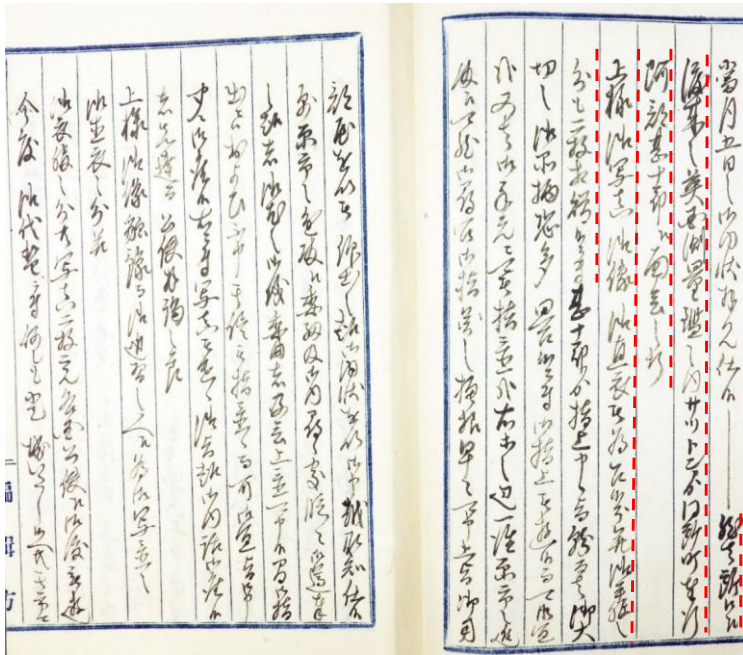
さらに、加賀藩より前にイギリス船の来航が予想される福井方面と新潟方面へ人を派遣し、対応への準備などについて情報収集を行いました(「英国人為測量御領海可致渡来旨等被仰渡一件」)。

本史料では、新潟方面に派遣された伏木肝煎彦五郎と高松組合頭太一郎による報告書をまとめたものです。安政6年(1859)に新潟へ測量に訪れたオランダやイギリス、ロシアへの対応や当時の様子などについて書かれています。

このように加賀藩内で準備が整えられる中、イギリス船は座礁などで予定より遅れ、航海の難しい季節になったこともあり、所口を訪れる事はありませんでした。

文久元年(1861)に幕府が条約締結国と交渉し、新潟開港が慶応3年(1867)に延期されました。開港となる慶応3年に再び新潟に代わる港を決めるための調査が行われました。所口港にはアメリカ、イギリス、フランスが測量に訪れました。以降では、イギリスの例を見ていきます。

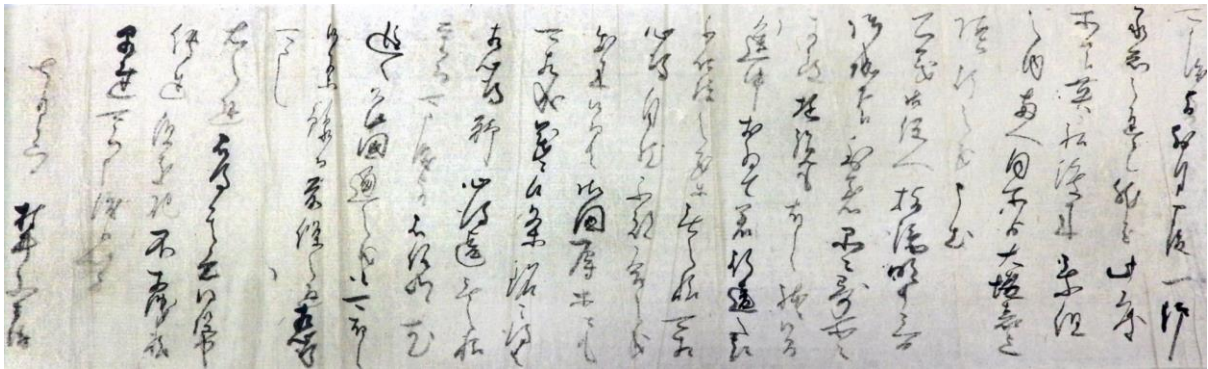
イギリス測量船は慶応3年5月26日から6月2日と7月の2回来航しています。7月にはイギリス駐日公使パークス、通弁官アーネスト・サトウ、書記ミットフォードが測量船と共に所口港を訪れました。



・然
・は
・所
・口
・江
・渡
・来
・之
・英
・国
・測
・量
・艦
・之
・内
・サ
・ツ
・ト
・ン
・方
・同
・所
・町
・奉
・行
・阿
・部
・甚
・十
・郎
・江
・面
・会
・之
・折
・上
・様
・御
・写
・真
・御
・像
・御
・直
・衣
・被
・為
・召
・候
・分
・并
・御
・平
・服
・之
・分
・も
・二
・枚
・相
・贈
・候
・二
・付
・

「奥村栄通書記風説書」(16.85-114㊦)

本史料からは、所口奉行阿部甚十郎がサットンから将軍徳川慶喜(「上様」)の写真2枚を贈られたことが分かります。サットンは同年の大坂城で行われた将軍徳川慶喜とイギリス・フランス・オランダ各国公使との会見の際に慶喜の写真を撮影していました。



「村井又兵衛より英国人城下通行に付注意書」(「海防に付御意見書等」16.56-8より)

早七右可候追重相可出心不途可公陸之
速達之申条々而心相来得仕中致城義行内
月可通候、各得、得、成、候、法、お、遊、下、御、之、両、
十二被組被、予而通、申、義、而、は、自、然、若、有、之、指、出、所、所、
日渡配其、前候旨、得、御、都、無、行、之、体、品、明、
候不意、同、通、相、心、得、尤、
村井又兵衛

また、この時サトウとミットフォードはパークスからの命令で所口から大坂まで陸路で向かうことになりました。加賀藩との対応や大坂までの道のりの様子について、サトウやミットフォードは記録を残しています。加賀藩は彼らの護衛や藩内で同伴に関する触を出すなどの対応をしました。

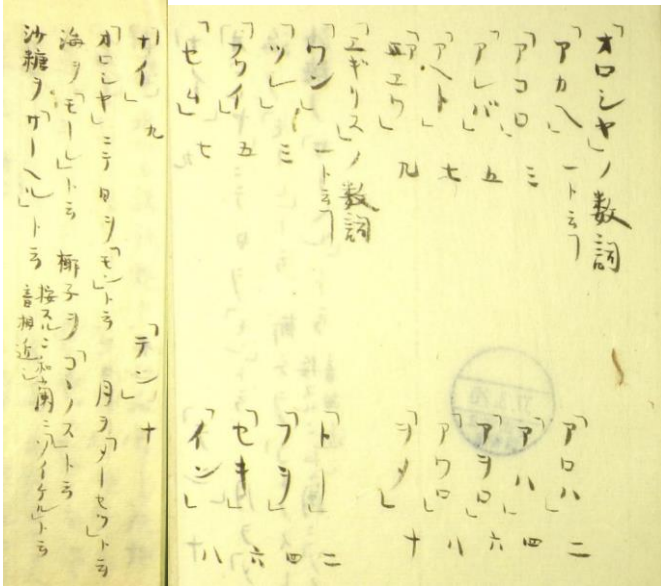
村井又兵衛はサトウ達の金沢城下通行に関して、不作法のないように求める注意書を出しました。

その後、各国と幕府による調査と話し合いの結果、日本海側の開港場は新潟と共に避難港として佐渡の夷港を開くことに決まりました。

異国船に救われた漂流者－越中長者丸の漂流－

日本近海で異国船の通航が活発になる中、航海の途中に漂流し異国船に救助される日本人もいました。越中長者丸乗組員の金蔵もその一人です。

長者丸乗組員達は、天保10年(1839)に漂流し異国船に救助された後に、ハワイ・カムチャッカ・オホーツク・アラスカへ渡り、同14年(1843)に帰国しました。「漂海略記」は弘化3年(1846)に帰村した金蔵の話を、越中高岡で医者を務めていた佐渡養順(文中は佐渡葆斎)が記したものです。



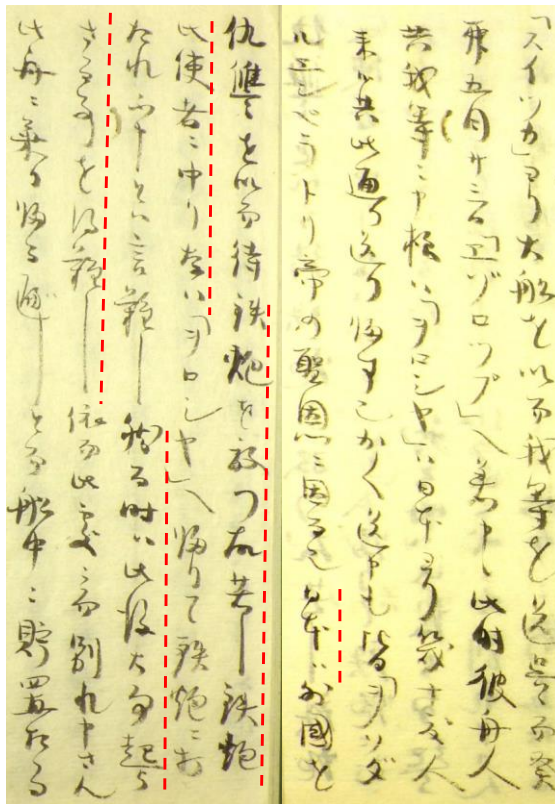
本史料には「オロシヤ」と「エギリス」の数詞や言葉が記されています。

「「オロシヤ」ノ数詞」として書かれている言葉は、後述の『時規物語』では「サントウイス語」(ハワイでの言葉)とされています。



「世界航海全図」(22. 6-29)

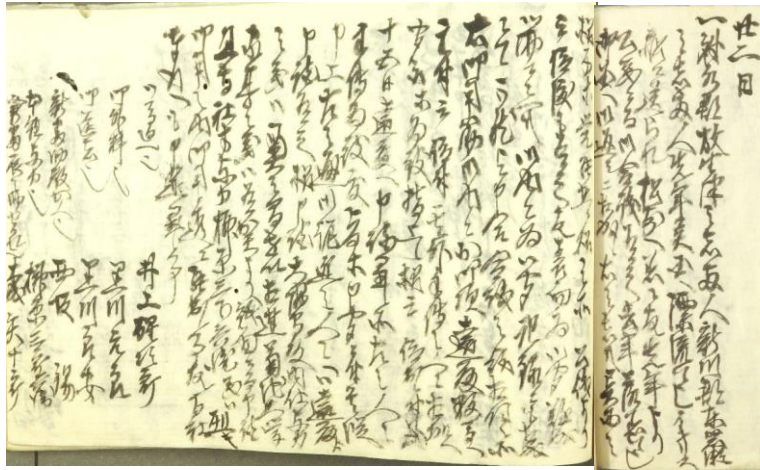
金蔵達は異国船に救助された後、最初に「サントウイス」(現ハワイ諸島)を訪れました。



(左上図及び下図)「漂海略記」(「異国船記録」20. 3-8より)

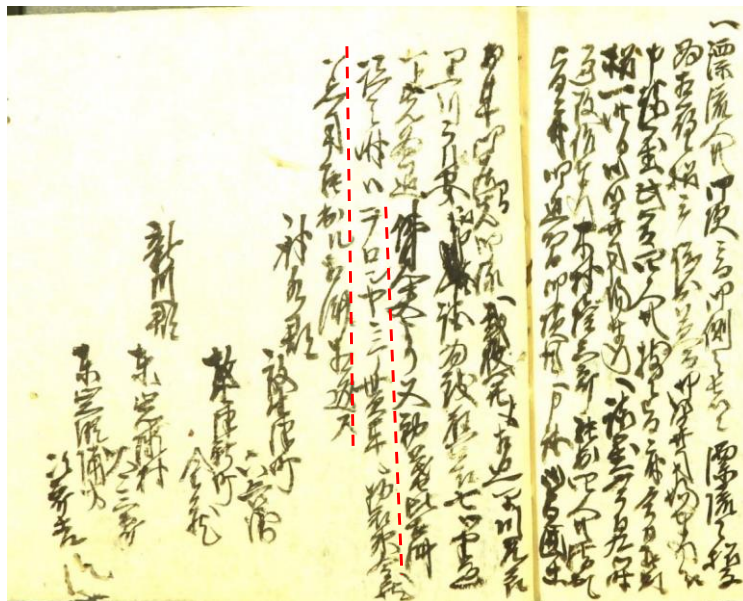
金蔵が帰国のために蝦夷地へ送られる際に向けられた言葉からは、当時の日本の打ち払い行為が大事件に発展する可能性もあったことがわかります。

「五月廿三日」ヨリ大船を以て我等を送候而、
 卯五月廿三日ハ、エリヨロツプヤ、我等申候、
 共我等此通ハ、送リ申候、日本ヨリ幾度ソ
 来候共、此ハ、聖恩ニ因りて、日本ハ外国を
 ルエンペラト帝の放シヤ、若くは、送リ申候、
 此を以て待リ、鉄砲を然らば、此ハ、送リ申候、
 仇讐を以て待リ、鉄砲を然らば、此ハ、送リ申候、
 使者の中り、待リ、鉄砲を然らば、此ハ、送リ申候、
 たれ、申す、待リ、鉄砲を然らば、此ハ、送リ申候、
 此舟を以て、待リ、鉄砲を然らば、此ハ、送リ申候、
 此舟を以て、待リ、鉄砲を然らば、此ハ、送リ申候、



加賀藩では帰国した長者丸乗組員を調査し、記録を作成しました。嘉永2年(1849)2月22日には、天文・測量・凶法に秀でていた遠藤高環などが編者に選ばれました(「成瀬正敦日記」16.42-29^㉔)。完成した記録は彼らが持ち帰った時計にちなんで「時規物語(とけいものがたり)」と題されました。

「時規物語」と「漂海略記」の内容を比較すると異なる点があります。人の記憶をもとにした漂流記の特徴が表れているといえます。



・・・
着用罷出ル、相濟、相返ス
ロシアヤニテ貫来候装束、金蔵

(上・下図)「成瀬正敦日記」(16.42-29^㉔)

同年3月17日には、乗組員次郎吉・太郎・金蔵・六兵衛が藩主齊泰の前で漂流の話を披露しました。本史料から、この時に金蔵がロシアの衣服を着たことがわかります。

※掲載史料と展示史料が一致しない場合がございます。

【参考文献】 ★は玉川図書館に所蔵あり

- ★『加賀藩史料』藩末篇上・下(前田育徳会、1958年)
- ★『日本庶民生活史料集成 5』(三一書房、1973年)「時規物語」収録
- ★高瀬重雄『北前船長者丸の漂流』(清水書院、1974年)
- 小野正雄「開国と新潟開港問題」(『新潟県史 通史編5 近世3』(新潟県、1988年)、第5章第1節に収録)
- ★倉田守「文久元年における加賀藩の海防政策-英国測量船来航への対策」(『北陸史学』第46号、1994年)
- ★萩原延壽『外交交際-アーネスト・サトウ日記抄 5』(朝日新聞社、1999年)
- ★小沢健志【監修】・三井圭司【編】『レンズが撮らえた 外国カメラマンの見た幕末日本 I』(山川出版社、2014年)
- ★藤田覚『幕末から維新へ』(岩波書店、2015年)